

図書紹介

Peter J. Wilson. *A Malay Village and Malaysia—Social values and rural development*. New Haven: HRAF Press, 1967. 171p.

本書は、著者 P.J. Wilson が、HRAF (Human Relations Area Files) の援助で行なった調査の報告書で、HRAF Press からペーパーバックで出されている。サブタイトルからも想像できるように、マレー半島における一つのマレー人村落に着目し、住民の価値観の分析を通して、村落開発の問題点を、どちらかと言えば一般読者を対象として論じている。

調査地は、Selangor 州のゴム栽培を主業とするマレー人農村 Jendram Hilir で、著者はこれを西海岸ゴム栽培地域における典型的な村の一つと考えている。調査期間は、1964年9月から1965年4月までである。

Introduction, Acknowledgments に続いてはじまる本文は、Chapter 1 から Chapter 4 に至る見出しのない四つの章からなり、最後に Conclusion が書かれている。

第1章において、著者はまず多民族国家としてのマレーシアの歴史、および調査村の歴史を略述し、このような背景の中で、マレー人村民が接触する他民族、すなわち中国人、インド人がどのようにステレオタイプ化して捉えられているかを述べる。

第2章では、前章をうけて、マレー人村民と外部の社会との接触のしかたを論じ、彼らが外部の文化を知っており、ときにはそれに参与することもあるが、全体として自分自身の文化に固執していることを指摘する。

第3章は、このような態度を経済生活の中にみようとすものである。主生業であるゴム栽培は、本来の生業である稲作、漁労などと異なって、金を稼ぐために外部から導入されたもので、栽培に関する儀礼なども全く欠いており、労働としては低く評価されていることなどを論ずる。

第4章では、村人の外界に対する反応の基盤を形

成する村内の社会関係と村の社会生活の構造を論ずる。

そして、結論の章で、再びこのようなマレー村落における近代化のうけ入れの困難さを指摘し、それをいかに方向づけるべきかを示唆する。

以上のような構成をもつこの書物は、専門的なモノグラフとしてみる際には、重要な指摘をしばしば認めることができる反面、ほとんどが叙述に頼っており、分析の基礎となった詳しいデータが示されていないために、やや頼りなさが感じられるかもしれない。しかし、一般読者にとっては、生活の変動に直面するマレー人農民の姿を理解する上に、非常に興味深い書物である。(坪内良博)

ピア・アヌマーン・ラーチャトン著、河部利夫訳註『タイ農民の生活』アジア・アフリカ言語文化双書1；東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所刊、1967。viii+135 p.

本訳書は、88才の高齢をもって、今日なお、精力的に研究成果を発表し続けている、タイ国の碩学、Phya Anuman Rajadhon 博士の労作 *Chiwit khong Chawna*. Bangkok, 1953 の全訳である。

原著は、タイ国人口の85%以上を占める米作農民の、水稲耕作を中心とする1年間の生活のサイクルを、きわめて克明に記述したもので、タイ国農村研究者必読の文献としてつとに定評があり、1955年、Michigan 大学の William J. Gedney 教授によって英訳されている。

内容は、都会と田舎の得失を論じた第1章にはじまり、田づくり、田の犂き返し、耙(まぐわ)かけと田植え、豊作と不作、稲の出穂と結実の頃、田の動物や植物、稲刈り、脱穀、脱穀場の儀礼、その他の11章より成る。著者の執筆態度は、ひとえに記述的であって、分析はほとんど加えられていないが、水田、各種の様態、使用農具の解説、犂耕、播種、

移植, 出穂, 結実, 収穫, 脱穀, 計量の実際から, 稲作儀礼, 水田の動植物にいたるまで, きわめて具体的かつ詳細な記述がなされており, さながら「水稻耕作百科」の観を呈している。

本訳書には, タイ国になじみの薄い読者の理解を助けるため, 各章末尾に, 詳細にすぎるほどの訳註と説明写真が加えられている。とくに巻末に付された62葉の参考写真は, 原文はもとより, 英訳にもなかったものであって, 本訳書の価値を高からしめている。

これまでタイ語文献でわが国に翻訳紹介されたものは, 若干の小説をのぞき, ほとんど皆無の状況であったが, アジア・アフリカ言語文化研究所の手によって, 本訳書のような, タイ人学者による研究業績が全訳刊行されたことは, まことに喜ばしいことである。同研究所によって今後, アジア・アフリカ諸国語で書かれた研究書が, 系統的に翻訳紹介されることを期待したい。(石井米雄)

J. Marvin Brown, ed. *AUA Language Center Thai Course, Book 2*. Bangkok: The American University Alumni Association Language Center, 1966. 131p.

先に紹介した *AUA Language Center Thai Course, Book 1* に直接続くものである。全体で20のレッスンより成り, 各レッスンに費やすべき時間数は, 教室での練習2時間に L.L. での練習1時間となっている。また, L.L. を使用出来ない者は, これを省略し50時間で本書を終えてもさしつかえないように工夫されている。各レッスンは, (1) Tone Practice, (2) Expansions, (3) Patterns, (4) Dialogue, (5) Contrast Drills, (6) Tone Identification Drills, (7) Taped Drills の7部分に分かれており, (7) が L.L. での訓練に当てられるわけである。全体を通じて, 各部分にはいろいろな名前がつけられてはいるが, すべてパターンによる反復練習の方法が取られている。したがって, 一語一語訳してからもう1度全体の意味を考えるとというような行き方は, Book 1 および Book 2 を通じて全然見られない。前半のタイ語には訳がつけられ

ているが, それも後半になると全くなくなる。本書を終了した場合どの程度のタイ語の力を身につけたことになるかという点であるが, わたくしは本書にある文章を本当に身につけてしまえば, 普通の日常の話し言葉では, まず困ることはないと思う。本書のタイ語は純粹の話し言葉ばかりであり, その話し言葉の文もすべてもれなく集められているわけではないが, まずこれだけの口語をものにしておけば, 必要に応じてそれを自分で拡大増加させることはたいてい困難ではないと思う。またタイ文字の使用法については, 本書の性格上, 各レッスンの末に少しずつ例をあげて説明しているだけであるが, それでも Book 2 を終えれば, 最少限の知識は得られるであろう。だいたい本書はタイ語の完成を旨とするのではなくて, 基礎的な話し言葉を能率よく身につけさせ, その基礎の上に各人の必要なり興味なりに応じて, さらに高度の能力を積み重ねてゆくことを予想するものである。ただ本書は AUA におけるタイ語コースにおいて, AUA の方法によりタイ語を学ぶという具体的な線にそって作られたものであるから, 誰がどんな方法で用いても効果が上がるというようなものではない。まず, 独学は不可能であろう。本書が予想している方法を心得た指導者の下に適当なインフォーマントを使用して授業を進めれば, かなり労少なくして効果を上げることが出来るのではないかと思う。いったいに本書ではこの「労少なくして」という点が重んじられているといえる。だから, その「労少なくして」得られる以上のことを本書から予期してはアテがはずれるであろう。

(桂満希郎)

L.M. Hanks, J.R. Hanks and Lauriston Sharp. *Ethnic Notes on Northern Thailand*, Data Paper No. 58. Ithaca: Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, 1965. xiii + 96 + 13p

1963年より1964年にかけて行なわれた Benington-Cornell Anthropological Survey of Northern Thailand に参加あるいは何らかの形で関係した研究者達のペーパーを集めたものである。全部で

12のペーパー、ビブリオグラフィーおよびタイ語用語のグロッサリーから成るが、今までにあまり名の知られていない若い研究者のペーパーも取り入れられている点が興味深い。ただ、この少ないページ数で12のペーパーを集めているのであるから、どれもみな短いものばかりで、取りあげられているテーマも小さいもので、かなり概括的である。しかし多いようで案外すくない北タイに関する研究書で、しかもタイ人以外の ethnic groups についてのペーパーが半数以上の7編を占めているのであるから、この地域の研究者にとっては、やはり興味をそそるものだといえよう。12のうち言語に関するものは、(1) R. B. Jones, “Phonological Features of Northern Thai” および (2) Herbert C. Purnell, Jr., “Two Grammatical Features of Northern Thai” とであり、いずれも北タイ方言 (N.T.) をテーマとしたものである。わたくしは他の分野のペーパーに関してどうこう言う資格はないので、以下、この二つのペーパーに話を限りたいと思う。

(1) は全部で5ページであるが、取りあげられている言語は Prae, Lamphun, Chiangmai, Chiangsaen, Nan, Bandu, Chiengrai の七つの北部方言および中部方言 (C.T.) である。著者の目的は、N.T. の中でもこれらの各小方言は互いに異なりながらも、C.T. にはないある共通した点を持っており、これが N.T. と C.T. とを分かつ要素であることを、簡略に示そうという点にあると思われる。このペーパーでは initial consonants と tones とに関して、以上の七つの N.T. と C.T. とを比較したものである。全体として別にこれと言って新しいものはないが、その目ざしている点はひじょうに興味の持てるものだと思う。例えば、N.T. と C.T. とのバウンダリーをどの辺に引くかといったような問題になると、さらに多くのこの種のデータが必要になってくるのではなからうか。著者もふれているように、Uttaradit, Pitsanulok あたりの方言についてこのようなデータを得ればおもしろいのではないかと思う。これから N.T. に関して field work を行なうならば、どこか一つの地にとどまってその方言の極めて詳しい記述研究を行なうか、あるいはひじょうに多くの地点を選んでそれぞれの方言を他と異ならしめている要素を明らかにしてゆくか、

この二つの線にそって行なうことになると思うが、本ペーパーは後者の行き方を進めるための出発点を示すものだと思う。

(2) は N.T. (Chiengrai, Maechan District の) と C.T. との文法構造を対照したもので、いわゆる比較言語学的研究ではなくて、両方言の “contrastive study” とするべきものである。全体で6ページ近いものであるから、両方言の文法構造全体を対照したのではなく、compounds および unrestricted intensifiers (e.g. /...càt, nák, etc.) における語順を対照している。compounds については /náam/ <水> および /câat-/ <ひじょうに、実に> (N.T.) について、これらが他の語と結合して compounds を構成する際の語順を対照する。例えば N.T. /náammêé/<河> : C.T. /mêénáám/. unrestricted intensifiers は、かなり数が多いのでここにあげることは出来ないが、同じような方法で C.T. との違いを、語順だけでなく semantic shift に関して、浮きぼりにしている。このペーパーは以上の2点に関してのみ両方言を対照したものであるが、文法構造全体の対照研究の行なわれることが望まれる。N.T. のどれか一つを C.T. と比較する場合、音声構造のみを比較することは、現代では、あまり意味がないとわたくしは思うが、この種の文法的な対照となると、今までにまとまったものがないだけに、N.T. の field worker にとってたいへんおもしろい研究になるのではないだろうか。

(桂満希郎)

Ratchabanditsathan, ed. *Khvamru thang Aksorasat*. Bangkok: Ratchabanditsathan, B.E. 2508 (1965). 5+321p.

本書はタイ国王立研究所 (Royal Academy) がこれまでに発行したことがある、主としてタイ語に関する論文および告示の類から、適当なものを選び新たに1冊の本にまとめて出版したものである。したがって、各文の初版年代はかなり古いものばかりであるが、その内容を見ると、タイ語に関心ある人達にとってまだその価値をうしなわないものばかりである。これら一つ一つの出版物が現在では入手不

可能であることを考えれば、本書のような形で再出版されたことはありがたいこととせねばならないだろう。本書に載録された文の著者名、題名、初版年代を示すと次の通りである。(1) Phya Anuman Rajadhon, 「タイ語における語変形・音節拡張」* 1952; (2) 辞典編纂委員会書記, 「何故“Chpho”と綴るか」1951; (3) Charoen Intharakaset 「辞典編纂委員会の事業」1953; (4) 内閣総理府および王立研究所告示「タイ語のローマ字表記」1939; (5) 内閣総理府告示「外国語単語のタイ文字表記」1942; (6) 内閣総理府および王立研究所告示「大陸名, 国名, 主都市名, 大洋名, 海名および島名のタイ文字表記に関する規定」1963; (7) Cham Thongkhamwan 「ラームカムヘーン王時代におけるタイ文字とコム文字との比較」。これらの中で純粋に「論文」の性格を帯びるのは(1)および(7)である。(3)は辞典編纂の際の討議録から興味あるものを集めたもので、内容的には(2)もこの中に含まれるものとみてよい。(4), (5)はローマ字のタイ文字表記およびタイ文字のローマ字表記に関する規定であり, Haas 式の音素表記になれた者にとってはなじみがたいところがあるが, いずれもかなりよく知られたものである。(6)はタイ語で物を書く際に参照するのに便利である。

(1)はクメール語から来た infix を持つタイ語の単語に関するもので, 本書を通じて最も興味深く読ませるものである。この infix と言うのは /kraɲ/ : /kamraɲ <k-am-raɲ/ における /-am-/ の類で, 現代タイ語には極めて多く存在するものであるが, これを音韻にもとづいて全部で九つのグループに分類し, 多数の例を集めたものである。ただ本論は何らかの結論を提出する論文というよりは, むしろ資料を整理整頓して研究の資料として供するものと言った方がよいだろう。歴史的あるいは比較的研究の際の便利な資料となるのではなからうか。(7)はラームカムヘーン王碑文のタイ文字は当時の略式コム文字 (akson khom charūk に対する akson khom wat) およびそれ以前より他のタイ族 (ルー, プータイ等) によって使用されていたモン系文字とに由来するものだとの考えにもとづき各文字を比較している。

以上のように, 本書の内容は真新しいと言うものではないが, なかなか興味深いものばかりであり,

また本筋とは直接関係のないような部分にも, 色々と研究のきっかけになるような点を多く含んでいる。

* 以下題名は筆者の私訳

(桂満希郎)

Tatuo Kira and Keiji Iwata, eds. *Nature and Life in Southeast Asia*, V. Kyoto: Fauna and Flora Research Society, 1957. vii + 312 + 20p.

大阪市立大学を中心とする東南アジアの研究報告書である。吉良竜夫・岩田慶治両氏の編集記にもあるように, マラヤ・タイを中心として, カンボジア・北ボルネオを含んだ資料の研究報告であり, とくに, 古生物・昆虫・霊長類・人類を中心にして, 新三カ年計画がはじめられるという。京都大学と, 大阪市立大学といずれも関西の大学が, 期せずして同じ地域の調査をはじめていることは, 日本の海外調査の中核の一つを形成し, たがいに良い意味での競争者として, たいへん有意義である。ひとつのモデル・ケースともなるであろう。今後とも, 同大学の研究の発展を願ってやまない。内容は次のとおりである。

TJBE 1961-62の淡水藻類——平野実

北部タイの山村における栽培植物

エノコログサ属——ウィルウェーバー・岸本

トウモロコシ属——町田暢

タイの森林の3型の生態的研究

群落の呼吸——依田恭二

主としてカオ・チャン降雨林における乾燥重量

物の生産について——吉良竜夫・小川房人・

依田恭二・荻野和彦

東シナ海周辺の淡水プラナリア——市川純彦・川

勝正治

タイのササラダニII——青木淳一

カンボジアのトンボ目について——朝比奈正二郎

タイおよび北ボルネオのアメンボ科——宮本正一

タイにおける害虫の天敵の基礎研究

前社会性膜翅類の生態——岩田久二雄

北タイの Thai Yai, Thai Lu その他の山地民

族の農耕について——岩田慶治・松岡通夫

(吉井良三)

William J. Siffin. *The Thai Bureaucracy—Institutional Change and Development*. Honolulu: East-West Center Press, 1966. x + 291p.

タイの政治社会の近代化について語るとき、少なくとも二つの点を見逃すことはできない。第一は、19世紀中期以降における政治行政の変化が、近代化の世界的趨勢にみごとに対応し、適応しきった点である。第二は、その変化の過程に、ふつう近代化に伴われやすい構造的不安定がさほどみられない点である。だから、タイの政治的近代化については、健全な成長あるいは少なくともある種の「成功」を指摘することが、正統的な問題意識ではなかるうか。

本書は、その意味での“正統的”な線にそって、タイ国行政機構の歴史的な発展を描き出したすぐれた研究である。19世紀中葉まで存続した家産制的統治構造が、どのような過程を経て現在の高度に近代化した機能的なメカニズムに変わったか、その過程を論理的に脈絡づけるのが、本書の狙いである。

本書は、前半と後半にわけてみてもいい。専制君主制と完全に癒着していた家産制的官僚機構が、1932年に至る君主制の崩壊にもかかわらず、どうしてなんらの不安定も示さず存続しえたのか、その理由の解明が本書の前半のテーマである。本書の後半は現在の官僚制を扱ってはいるが、タイの官僚制が、近代化の過程で、伝統的な文化を巧みに温存活用し、近代化の趨勢へ対応すると同時に、タイ社会の後進性・保守性への対応も行なった事実をも暗示している。タイの官僚制の発展過程には、ダムロン親王による行政改革(1892年)という一つの革命的断絶点はあるが、基本的には、万事が漸進的、なしくずし的に変化してきている。革命や断絶に乏しい発展であるために、伝統的な文化様式がさほど払拭されずに温存されることになったのだ。

著者は、第9章で、官僚機構に活力を与えている(energizing)要素に触れながら、業績や生産性を指向する価値がインセンティブにならないこと、伝統的な権威関係つまり personalism が強くはたらいしている事実を指摘している(pp. 217~221)。この指

摘は大事である。著者によると、タイの官僚制のすべてを説明する原理は、「官僚になることは、一つの生活様式をもてること」という法則であるという。人材補充がうまくいく点も、不安定に悩まずにすむ点も、同時に、完全に近代化しきれない傾向も、すべてそれらで説明がつくようだ。

本書の魅力は、第7章以下の現代官僚制の特徴を描く個所にある。この限りでは、ほかに類書をみないし、まして右に出る本もない。事実、タイ国官僚制の現状は、本書によって立派に分析されていて、学ぶところが多い。著者の Siffin 教授は、TVA などとも深い関係をもち、実務体験の豊富な行政学者である。従って、かれの分析は、感覚的にもすぐれ、細かい問題把握に至るまで生き生きとしている。対象とするタイ官僚制を殺してしまわない点にすぐれた特色がある。

第6章までの歴史的展望の個所は、歴史の基本的な筋道を追う仕事としては成功しているが、歴史学的にすぐれた業績だとはいえない。致命的な限界は、やはり英語の二次資料だけに頼っていることである。絶対王制段階の研究は、英語文献だけではどうしても無理である。ダムロン親王の行政改革については、たとえば Cakrakrit Noranitiphadungkaan の「ダムロン親王と内務省」(チュラーロンコーン大学政治学部 B.E. 2506年刊)などのタイ語で書かれたすぐれた業績などを無視してはいけないと思う。

Riggs の最近著“Thailand—The Modernization of a Bureaucratic Polity”にしても、本書にしても、英語資料だけに基づいて書かれた研究書のメリットはなんであろうか。この2書とも、すぐれた業績であることは認めねばなるまい。すぐれている理由は、タイ国近代史の問題点の所在を、それぞれのやり方で明確に示し出しているからである。その限りでは、両書とも古典的意義をもつものと断じてよかろう。従って、今後の課題は Riggs や Siffin が示し出した歴史学的な命題の一つ一つを、示唆あるいは仮説として受けとめ、実証的なやり方で、それらを検証し、確認することである。本書の意義も、基本的には、問題提起にあると考えたほうが妥当であるかも知れない。(矢野 暢)